愛媛大学教育学部保健体育紀要第８号：53-58, 2012

バンクーバー・オリンピックの新聞報道にみるジェンダー

石井　浩一[1)]

Gender in the newspapers of the Vancouver Winter Olympic Games in 2010

Hirokazu Ishii [1]

Key words: gender, Olympic Games, newspaper

(Bulletin of Department of Physical Education, Faculty of Education, Ehime University, 8,53-58, March, 2012)

キーワード：ジェンダー，オリンピック，新聞報道

Ⅰ　はじめに

本稿は，2010年に行われた第21回オリンピック冬季競技大会（バンクーバー）（以下、バンクーバー五輪）の新聞記事を分析することによって，ジェンダーを読み取ることを目的とする．分析した新聞は，読売新聞・朝日新聞・毎日新聞で，オリンピック報道が始まった2月14日～3月3日までの記事（写真含む）を対象とした．

ジェンダーとは，オス，メスという生物学的・解剖学的性差ではなく，男らしさ，女らしさといった社会的・文化的に構築された性差のことをいう．たとえば，「男は仕事」「女は家庭」といったことは，ジェンダーになる．

ジェンダー（gender）は，もともと言語学の用語であったが，1960年代後半から起こった第２派フェミニズム（女性解放運動）が積極的に用いるようになった．スポーツにおけるジェンダーの平等と公平を求める動きは，第1990年代から急速に活発化してきたといわれる[1)]．

女性が初めてオリンピックに出場したのが1900年の第２回パリ五輪であり，2000年のシドニー五輪は，女性が初参加してからちょうど100周年の，記念すべき大会となった．

飯田は，2000年シドニー五輪の新聞報道から，メディア表象へのフェミニスト分析を行っている[2)]．本稿は，それから10年経た2010年バンクーバー五輪の新聞報道に焦点をあてる．

Ⅱ　バンクーバー五輪の概要

第21回オリンピック冬季競技大会は，2010年2月12日（日本時間13日），カナダのバンクーバーで開幕し，2月28日（日本時間3月1日）まで，17日間にわたって熱戦が繰り広げられた．

本大会には、史上最多の82か国・地域から約2,500人の選手が参加．全7競技86種目が行われた．地元カナダは史上最多の金14のほか銀7，銅5の計26個のメダルを獲得した．

日本代表は男子49，女子45の94人．スピードスケート男子500mで銀と銅，スピードスケート女子団体追い抜きで銀，フィギュアスケート女子で銀，男子で銅の，計5個のメダルを獲得した．

1）愛媛大学教育学部
〒790-8577　愛媛県松山市文京町３番

1．*Faculty of Education. Ehime University, Bunkyo-cho 3, Matsuyama-shi, Ehime, 〒790-8577, Japan*

Ⅲ　新聞報道の量的分析

三紙合わせてのオリンピック関連記事の総面積のうち，女性の割合が43%，男性の割合が35%，両性の割合が22%であった．シドニー五輪をみると，女性が44.2%，男性が43.0%，両性が12.8%であった．男女の報道量がほぼ等しかったシドニー五輪から，バンクーバー五輪では，女性の報道量が上回ったことになる．

では次に，表１を元に見ていこう．表１は，バンクーバー五輪の新聞報道を競技別・性別に分けて，その占有率を表したものである．表中「なし」というのは，その種目そのものがない，ということである．たとえば，スキー・ジャンプは女性の競技も行われているが，オリンピックでは採用されていないので「なし」，同様にノルディック複合も採用されていないので，「なし」とした．たとえどんなにマイナーな競技でも，実施された競技は必ず記事にはなるので，競技があるのに，報道が「なし」ということではないことを，付け加えておく．

次に，女性の報道量が男性を上回っている競技（種目）を見ていこう．上回っているのは，スノーボード（以下、スノボ）・パラレル大回転，スノボ・クロス，スキー・距離，スキー・大回転，スキー・モーグル，スキー・エアリアル，スピードスケート，ショートトラック，フィギュアスケート，カーリングである．

なかでも，モーグルの上村愛子，フィギュアの浅田真央，カーリングの女子日本代表チーム（チーム青森）の報道量が目立っている．まず上村に着目してみると，上村は里谷多英の後を追って，少しずつ上がってきた選手という印象が強い．里谷多英とは，モーグル競技の日本人選手として唯一メダルを獲得している先駆者である．今回のバンクーバー五輪

表１　バンクーバー・オリンピック新聞報道の競技別・性別占有率

競技名（種目名）	男性占有率（%）	女性占有率（%）	両性占有率（%）
スノーボード（ハーフパイプ）	3.8	0.6	
スノーボード（パラレル大回転）	0.1	0.3	
スノーボード（クロス）	0.2	0.3	
スキー（ジャンプ）	5.3	なし	
スキー（ノルディック複合）	2.0	なし	
スキー（距離）	1.1	2.2	
スキー（滑降）	0.2	0.1	
スキー（回転）	1.4	0.5	
スキー（大回転）	0.1	0.2	
スキー（スーパー大回転）	0.2	0.08	
スキー（スーパー複合）	0.4	0.04	
スキー（クロス）	0.4	0.2	
スキー（モーグル）	0.4	4.2	
スキー（エアリアル）	0.1	0.2	
バイアスロン	0.5	0.4	
スピードスケート	8.5	9.7	
ショートトラック	1.4	2.1	
フィギュアスケート	11.6	21.0	
フィギュア（ペア、アイスダンス）			2.5
アイスホッケー	1.8	0.6	
リュージュ	0.7	0.6	
スケルトン	1.1	0.1	
ボブスレー	0.9	0.8	
カーリング	0.8	7.2	

にも出場したが，19位に終わった．

2月14日の毎日新聞に，上村と里谷のプロフィル，主な成績，象徴的なコメントの対照表が載っている．そこには，長野で金を獲った里谷に対し，上村は7位，次いでソルトレークシティーで銅を獲った里谷に対し，上村は6位，前回トリノで15位だった里谷に対し，上村は5位と，華やかな成績を残してきた里谷に対し，もどかしいともいえる成績に，心を揺さぶられる．そして，今回4回目のオリンピックに人々の期待は膨らむ．ゆえに報道量が増える，と言いたいところだが，はたしてそれだけが報道量が増えた理由だろうか．スポーツとジェンダー表象について，阿部は以下のように述べている[3]（、。は引用文のまま）．

> メディアによるスポーツ選手の表象についてまず言えることは、人びとにとって魅力的な身体の持ち主が、見た目＝ルックスにおいても魅力的な存在として描き出されている点である。このことは女性アスリートの場合には、カワイイ／キレイといった基準に照らして選手たちがメディアに取り上げられることに見て取れる。一例を挙げれば、スキー・モーグル競技の上村愛子選手の場合，世界大会で入賞を果たすほどの実力だけでなく、アイドルのようなルックスが人気の源泉であること誰の目にも明らかであろう。（中略：筆者）
>
> メディア表象において価値づけられているのが、必ずしもアスリートたちの競技能力だけでないことは改めていうまでもない。むしろメディア表象においては、時としてスポーツ以外の要素がスポーツ以上に大きな意味を持っている。人気選手たちの魅力や人気を生み出す競技能力以外の要素を端的に言い表す言葉が、カワイイ／キレイにほかならない。つまり、ただ単にスポーツ競技において優れているだけでなく、外見やしぐさが、カワイイ／キレイなことが、女性スポーツ選手たちがメディアに取りざたされる大きな理由の一つとなっているのだ。

上村は結局4位に終わったが，引退表明はせず，現在も競技を続けている．オリンピックで7位，6位，5位，4位と，周囲がじれったいと思うほどの成績も手伝って，上村が競技を続ける限り，彼女の人気が衰えることはないだろう．

上村と同様のことが，フィギュアスケートの浅田真央にもいえるだろう．フィギュアスケート女子は，これまでに1992年のアルベールビルで伊藤みどりが銀，前回トリノで荒川静香が，日本フィギュアスケート史上初の金メダルを獲得した，期待の種目である．結果，金メダルは韓国のキム・ヨナが獲ったが，浅田は堂々の銀メダルに輝いた．加えて，彼女のルックスが報道量に与えた影響は，やはり否定できない．

次に，カーリングの女子日本代表「チーム青森」はどうか．前回のトリノ大会の1次リーグで強豪のイギリス，カナダを破る大健闘を見せ，「チーム青森」は一躍人気者になった．前回から結婚などで5人中3人が入れ替わったチーム青森は，愛称「クリスタル・ジャパン」として，アイドル的存在に仕立て上げられていく．

クリスタル・ジャパンは競技前半3勝2敗でスタートしたが，その後4連敗を喫し，通算3勝6敗で1次リーグ敗退という結果に終わった．しかし，報道量はメダルを獲得しなかった競技の中では群を抜く7.2％である．このことから，クリスタル・ジャパンがカワイイ／キレイと，多くの人たちから認知されていることがわかる．

では逆に，男性の報道量が上回っている競技（種目）を見ていこう．阿部は，メディアに取り上げられる選手について以下のように述べている[4]（、。は引用文のまま）．

> 女性アスリートたちがカワイイ／キレイを価値基準としてメディアに取り上げられているのに対して、男性アスリートたちは、主としてカッコイイことが重要視されているように思われる。つまり、人気男性スポーツ選手に要求される競技能力以外の要素とは、見た目や生きざまがカッコイイことであろう。

まず，スノボ・ハーフパイプの報道量は，男性3.8％：女性0.6％である．スノボは男女ともメダルなしだった．成績に関わらずこれだけの報道量の差になったのはなぜか．

カッコイイ選手の報道が占めたのか，というと残念ながら今回はそうではない．この差は男子代表の国母選手の腰パン，シャツ出しといった服装の乱れ，「反省してま～す」の語尾のばし言葉が物議をかもした件が多くを占めたからである．

他の競技を見ると，スキー・回転の男女差が少し目立つが，これは前回トリノ五輪で4位に入った皆川賢太郎に期待が集まった結果だと考えられる．その他は特筆するほどのことではない．

冬季五輪は，夏季五輪に比べて顔や体の露出が少ない．スキーはサングラスかゴーグルをしているし，頭はヘルメット，帽子，体はスーツで覆われている．スケートもスキーと同様ほぼ覆われている．

容姿の露出が多い競技はフィギュアスケート女子だろう．したがって，フィギュアスケートの写真付き報道量は，おそらく成績に関わらず多くなることが推察される．夏季であれば，ビーチバレー，体操競技，新体操，シンクロナイズド・スイミングなど，容姿の露出が多い競技の報道が多いことが知られている[5)]．

Ⅳ　見出しの分析

本章では，新聞の見出しに着目してジェンダーを見ていく．まず上村愛子が出場したモーグル競技の主な見出しから見ていく．

愛子　悔し涙4位
里谷　痛恨の転倒
愛子　また届かず
19歳遠藤7位
愛子　運命の地
上村，女王への3ヵ条
上村全力　涙の4位
カーニー会心　初の「金」
愛子の速さ　見たかった
上村「不安ない」
上村「悔しい」4位
上村　五感に狂い
ビロドー値千「金」

上村選手は「愛子」「上村」と呼ばれているが，他の選手は苗字でしか呼んでいない．里谷選手を「多英」と呼ぶ記事は一つもなかった．男子選手でも同じである．また上村選手がほほえむと，それは「愛子スマイル」と命名される．苗字ではなく名前で呼ぶことは，それだけ親近感を持たせるし，○○スマイルというと，その選手の笑みが他の人とは違う，特別なものだと感じるようになる．メディアは，このように巧みにカワイイ／キレイな選手をアイドル的存在として仕立て上げていく．

次にフィギュアスケートの主な見出しを見ていこう．

高橋は17番滑走
高橋魅惑の滑り
復活　高橋弾む
高橋歓喜　結んだ夢
高橋「銅」
高橋　華麗に舞う
4回転回避　織田「実力不足」
織田悲運　切れた糸
真央「金メダル欲しい」
「金へ」真央流調整
鈴木　本番へリンク初滑り
真央「ワクワク」
真央「すべて調子いい」
真央「いい緊張感」
天才真央　ココがすごい
採点の傾向　真央に好材料
鈴木　滑る喜び全身で
ヨナ完璧　世界最高点
真央　会心の舞「ほっ」
美姫　誓いのレクイエム
真央　万全
「真央」支える「舞」
日韓19歳　宿命対決
真央「銀」
真央「すべてできた」
美姫　成長の5位
美姫「4年後メダル」
安藤が現地入り「平常心で来た」
織田　初舞台堂々
安藤，本番リンク「滑りやすい」
高橋メダル射程
高橋　金しか見えない
大ちゃん世界魅了
流麗　ステップ王子
真央→ヨナ→明子→トリは美姫

浅田2位・安藤4位発進
3人娘いざ
美姫へ10文字エール
高橋　4回転がカギ　織田　安全策で追う
跳べ真央　金の壁

苗字以外で呼ばれているのは，フィギュアスケートの浅田真央，鈴木明子，安藤美姫の女性3人と，1件だけ「大ちゃん」「ステップ王子」と呼ばれている高橋大輔だけである．特に記事の量に比例して，「真央」が圧倒的に多い．銀メダルを獲得した浅田に報道量では及ばないものの，フィギュアスケートの女性選手はアイドル的存在に仕立てあげられやすい．基本的にフィギュアスケートの選手は容姿端麗が多い．女性3人が名前で呼ばれるのには，カワイイ／キレイの基準を満たしていることが推察される．

では次に，長島圭一郎が銀，加藤条治が銅メダルを獲得したスピードスケート男子500mの見出しを挙げる．

長島は第19組
「天才」加藤　雪辱
長島流　貫き輝く
加藤　悔しい銅
長島「銀」　加藤「銅」
「晩成」長島　大輪
甘え卒業の銅
長島　強く美しく
長島・加藤ら　メダル授与式
長島，2個目に期待
末っ子　最高の輝き
低迷ニッポンに光
夢色　歓喜「動と静」
トリノの涙　結晶

長島選手と加藤選手が苗字以外で呼ばれることはなく，フィギュアスケートの前記4選手とは明らかに扱いが異なることがわかる．

続いて，銀メダルを獲得したスピードスケート女子団体追い抜き（穂積，小平，田畑）の見出しを見てみよう．

女子団体追い抜き4強
23歳小平　メダルへ滑走
三本の矢「銀」射抜く
田畑マジック　若手引っ張る
両親の眼前　3人娘輝いた
小平「成長とともに駆け抜けた」
日本女子　追い抜き「銀」
寅年トリオ偉業
銀色の3曲線
ベテランが導いた銀

以上の見出しから，フィギュアとの個人，団体という違いはあるが，やはり扱いが異なることが見て取れる．

V　競技種目にみるジェンダー

オリンピックのみならず，競技スポーツの世界は男性種目と女性種目に分かれている．女性が初参加した1900年のパリ大会では，女性の競技はゴルフとテニス（シングルスと混合ダブルス）のわずか2競技であった[6]．

その後，フェンシング，ヨット，フィギュアスケートなどの競技に徐々に進出するようになったが，1988年のカルガリー冬季五輪では，アイスホッケー，バイアスロン，ボブスレー，ソウル五輪ではサッカー，ボクシング，レスリング，ウエイトリフティング，柔道（デモンストレーション競技として実施），近代五種は女性の正式競技として認められていなかった[7]．逆に男性が参加できない競技に，新体操，シンクロナイズド・スイミングがあるが，冬季五輪で男性が参加できない競技はない．

一方，女性が参加できないのはスキー・ジャンプ，ノルディック複合だけで，アイスホッケー，バイアスロン，ボブスレーは女性の正式競技になっている．したがって，男性種目と女性種目の垣根は極めて低くなっている．将来スキー・ジャンプ，ノルディック複合が認められれば，男女の種目差はなくなる．

ただし，表１の報道量の差異から「男らしい種目」「女らしい種目」というジェンダーを読み取ることができるのではないだろうか．たとえば，フィギュアスケートの報道は女性21.0％に対し男性は11.6％とかなり差がある．一方，アイスホッケーを見ると，男性が1.8％であるのに対し，女性はわずか0.6％である．

ここには，フィギュアは「女性にふさわしい」「女性らしい」種目，アイスホッケーは

「男性らしい」「男性にふさわしい」種目という，メディアによる巧みな誘導を見て取ることができる．

Ⅵ　まとめ

本稿はバンクーバー・オリンピックの新聞報道を分析することによって，ジェンダーを読み取ることを目的とした．

報道量では，フィギュアスケートが他の競技種目よりも群を抜いて多く，なかでも女性の報道量が際だっていた．これはメディアに取り上げられるカワイイ／キレイの基準を満たした選手がいたからだと考えられる．報道量はフィギュアには遙かに及ばなかったものの，スキー・モーグルの上村選手，カーリングのクリスタル・ジャパンにも同じことがいえよう．

見出しの分析からは，苗字ではなく名前で呼ぶことで親近感，親しみやすさを感受させ，ナラティブを創出することで，アイドル的存在に仕立て上げる意図が読み取れた．

また競技種目の報道量の差は「女性らしい，女性にふさわしい種目」「男性らしい，男性にふさわしい種目」という認識を誘導する巧みな操作と解釈することができる．

最後に強調しなければならないことは，今回の新聞報道のうち，女性記者による報道はわずか0.03%であったということである．新聞記事すべてに記者の氏名が付されているわけではないので，不明（無記名もしくは男女の区別ができなかった氏名）が全体の0.3%あるが，それにしても女性記者が少ない．すなわち，記事のほとんどは男性が決め，「男性のまなざし」で書かれているとうことである．

引用・参考文献

読売新聞，2010年2月14日－3月3日

朝日新聞，2010年2月14日－3月2日

毎日新聞，2010年2月14日－3月2日

1）飯田貴子　2002　メディアスポーツとフェミニズム（橋本純一編『現代メディアスポーツ論』，世界思想社，p.72）

2）飯田貴子　同上書，pp.77-90

3）阿部　潔　2009　スポーツとジェンダー表象（飯田貴子・井谷惠子編著『スポーツ・ジェンダー学への招待』，明石書店，p.101）

4）阿部　潔　同上書，p.102

5）飯田貴子　前掲書，pp.80-81

6）日本オリンピック・アカデミー編　1988『オリンピックものしり小事典』，池田書店，pp.128-134

日本オリンピック委員会監修　日本オリンピック・アカデミー編　1981『オリンピック事典』，p.524

7）日本オリンピック・アカデミー編　前掲書　pp.133-134